「日々の理科」（第 1068 号） 2017（H29),-6,-9

「メジロの落ち雛」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

今の時期、街路樹の下や公園の林の地面に、落ち雛を見かけることが多くなる。巣立ちをしたばかりのヒナは、まだ飛翔能力が低いので、そのまま地面に落ちてしまうことが多いのだ。

理科室の前にはこんなポスターが貼ってある。野鳥はたとえ小さなヒナでも、鳥獣保護法で捕獲は禁止されている。また、病気が原因で落ち雛になることもあるので、素手で触れること自体が危険な場合もある。

先日、１年生の子どもが校庭の隅の林の中で、落ち雛を見つけた。拾ってはいけないと知っていたようだが、それでもそのままにはできなかったのだろう。まあ、無理もないことである。教室に持って来ようとした途中、校庭の真ん中で子どもの手から飛んで、芝の上に落ちてしまったようだ。

「通報」を受けて駆け付けると、まさしくポスターに描かれたのと同じ、メジロのヒナだった。芝の陰でじっと動かない。「雲隠れの術」を心得ている。

時々、校庭隅の林のほうから「チーィチーィ」とメジロの声が聞こえる。親鳥の声らしい。それに応えるように、ヒナもか細い声で鳴いていた。私は１年生の子どもに発見した場所を教えてもらい、メジロの鳴き声を真似ると、幸い親鳥が姿を現した。そのスダジイの木の枝にヒナを載せて、そっとその場を離れた。